いま何が問われているのか

朝日新聞
93(H5).8.8

初め 戦争はなかった

国立歴史民俗博物館副館長 佐原 真

1932年、大阪市生まれ。大阪外国語大学でドイツ語を専攻、京都大学大学院で考古学を学び、博士課程修了。奈良国立文化財研究所に29年間在籍し、今年4月から現職。弥生時代が専門で、現代につながる考古学を平易に説く。主著に『日本人の誕生』『日本文化を掘る』『考古学千夜一夜』など。

▽人類の長い歴史の中でみると戦争の歴史はごく最近始まったものでしかない。
▽戦争は農耕とともにあり世界を滅ぼすほどにまで文明がそれを育ててしまった。
▽このことを全世界の教科書に書き記す運動を起こしたい。

認識広まれば 戦い根絶に道

世界の教科書に記す運動を

アメリカのアルビン・トフラーの近著『戦争と平和』（徳山二郎訳）によると、第一次世界大戦は「すべての戦争を終わらせるための戦争」と呼ばれたそうである。しかし、戦争は今も世界各地で絶えることなく起こっている。

考古学を学ぶものとして、ここでぜひ読者に知っておいてほしいことがある。それは人類の長い歴史の中で、人の集団と集団がぶつかりあって数多くの人命を奪う、という意味での戦争は、ごく最近に始まったという事実である。人間の歴史四百万年に対して戦争の歴史は一万年以内、たとえるなら四材の中の一枝に満たないのだ。

裏付けを欠く「殺しの本能」

一九五〇年代からベトナム戦争の激しかった六〇年代にかけては、人類が最初から殺しの本能（キリングインスティンクト）を備え、争い、食べ合ったという主張が盛んだった。猿人（アウストラロピテクス）が殴り殺されて、頭蓋骨（ずがいこつ）がくぼんでいる、という判定からであった。

アフリカの考古学者、リチャード・リーキー（『人類の起源』岩本光雄訳、一九八五年）によると、これがもとになってアメリカでは争いを主題とする小説・映画が流行した。「ウエスト・サイド物語」もその一つだという。動物行動学をおこしたコンラート・ローレンツも、この風潮のなかで「攻撃」を書いたのだそうだ。

しかし、頭蓋骨のくぼみは、土圧で生じたものと判明し、最古の人間の殺しの本能や食人は否定されることになった。それでは、何人かの研究者が認めている五十万年前の北京原人の食人はどうか。

異常な事態――極限の飢えや変質者――が食人をまねくことがある。それを除く「普通」の食人には、近親者や仲間うちの遺体を愛情や尊敬をもって食べ、骨を粉にして酒に入れて飲むなどの「族内食人」と、敵、よそ者を殺して憎しみをもって食べてしまう「族外食人」とがある。この両方を併せて行う人びとはいないのだそうである。

リーキーによると、南アメリカの民族例では、族内食人は食料採集民（食用植物の採取・狩り・魚とりなど自然の恵みで暮らす人びと）がもっぱら行う。族外食人は主として農民たちのものである。そうすると、北京原人の食人の動機は飢えか、族内食人つまり死者への敬愛の可能性も大きい。人間の殺しの本能を立証するために、化石人類を引き合いに出すことはもはや許されない。

ここで読者に質問がある。あまり考えずに答えてほしい。

狩人（食料採集民を代表させる）と農民では、どちらが好戦的で、どちらが平和的か。

その正解を求めるためにも、一一万年前以前の更新世（旧称洪積世）の「狩人」たちの争いについての考古資料を二つあげることにしよう。

一つは、一九六〇年代にアフリカのスーダンで見つかった「紀元前一万二千―一万一千年」の集団墓地（ジェベル・シャバ一一七地点遺跡）である。ここに埋葬されていた五十八遺体のうち半数近くに、老若男女の別なく石器が突き刺さるなど殺された跡をとどめていた。この遺跡を調査したアメリカのウェンドルフは、食料が尽きるなど特殊の条件下で起きた殺し合いの結果か、と書いている。

西アジア・アフリカの石器時代に詳しい藤本強さん（東京大学）に尋ねたところ、集団墓地を作っていること自体が定住的生活が始まっていたことを示している。初原的にせよ農耕を始めていた可能性も大きいし、年代も新しくなるかも知れないとのことである。

もう一つは弓矢で激しく争い合う人びとを描く東スペインのパルパリョの洞穴画である。かつて一万年以前の食料採集民の戦争の証拠ともされたこの絵はいま、もっと新しく農耕が始まって以降のものとされている。結局一万年以前の食料採集民による戦争の確実な例はないことになる。

現状で、戦争に備えた世「更新世にも人殺しはあった。しかし戦争の証明は出来ない」。これはアメリカの人類学者M・K・ロバーの言（一九六九年）である。

富の発生から侵略が始まる

私自身も実は、食料採集民の方が好戦的で残酷だと思い込んでいた。しかし、彼らの方が基本的に平和なことは、世界の民族例についての山田隆治さん（南山大学）の説明（一九六〇年）で明快である。食料採集民の争いの原因の多くは、殺人や女さらいへの報復という個人的な動機にある。彼らには蓄え・富、つまり奪うべきものがない。戦争の経済的動機がない。呪術（じゅじゅつ）・宗教も成熟しておらず、戦因とはならない。そして彼らが争う場合には、少数が倒れると武器をおさめる、という形式的な抗争が多いのである。

農耕が始まると奪うべき蓄え、富が生じて戦争が始まる。社会は成熟し、国が出来上がっていく過程で戦争が起きる。国と国が対立し、侵略し征服する……。

界最古の村はヨルダン峡谷のイェリコ遺跡である。九千五百年前、最古の農民たちは岩盤を掘って墓（ほり）をめぐらせ、石積みの防壁と物見やぐらを築いた。それ以降の西アジアの多くの都市は戦争で破壊されている。虐殺の跡をとどめているものもある。農業が最も早く始まったこの地で世界最初の戦争は始まったのである。

日本では二千四百―千七百年前、農耕社会が生まれた弥生時代に九州、四国、本州で戦争が始まった。石や青銅の武器の先端が折れて骨の中に残ったままの墓、あの世の戦いに備え青銅や鉄の武器を添えた墓、墓をめぐらせて物見やぐらを立てた村（佐賀県吉野ケ里遺跡）等々、弥生時代の戦争の証拠は十分にある。

沖縄では、十―十二世紀ごろに農耕が始まり、集団同士の争いも起き、日本本土からの倭寇（わこう）の脅威にもさらされた。十三―十八世紀、丘の上にとりで（グスク）が出現している。北海道でも十五―十八世紀に丘の上にとりでを築いている。食料採集民であるアイヌの人びとの間の争いが原因と見るよりは、本州の人びとの進出に応じて戦争が始まったと理解する方が自然と思う。

人間の戦争観 全く進歩せず

今みてきたように、戦争が大局的に農耕とともにあり、世界を滅ぼすほどのものにまで文明がそれを育ててしまったことを知る時、思うことは多い。

九千五百年前の人間最古の戦争以来、敵が正しく、味方が悪い戦争は一度もなかったに違いない。すべての戦争は正義の職いであり、神の加護のもとに行う聖戦だったのだろう。

とすれば、兵器、戦術などを著しく進歩させた半面、戦争の本質のとらえ方において、人間は全く進歩していないのではないか。

ヒトの学名はかつてホモ・サピエンス（知のヒト）だった。しかし、いつの間にか知を二つ重ねてホモ・サピエンス・サピエンスとなっている。サピエンスの一つは返上して、戦争を捨て去った後、初めて二つを重ねたらどうか。

日本国憲法の理念を世界に広めようという「憲法九条の会」がアメリカにあるそうだ。その会長のM・オーバビーさんの「第二次大戦後、日本の兵士に殺された人は世界に一人もいない」という言葉に震えるほどの感動をおぼえた私は、自分が考古学研究者であることも忘れて、未来に対する一つの夢を描き始めた。

スタインベックのOnce there was a war（邦訳『かつて戦争があった』）になぞらえるならば、初め戦争はなかった、のである。この認識を人類共通のものにしたいものだ。

半世紀間、世界の人を戦争で殺さなかった日本から、全世界の教科書に「初め戦争はなかった」と書き記す運動を起こしたい。

人間は長い歴史の大部分を戦争なしに生きてきたこと。子供たちが学校で、教科書で学ぶべきことのなかで、これほど大切なことはないのではないか。そして地球上のすべての子供たちがそれを学ぶならば、やがては戦争を根絶することにつながるのではないか。

そのために私たちは、戦争の起源についての学習を深め、多くの分野の人びとで語り合い、日本だけでなく、世界の人びととも討議を重ねなければならない。

再来年、オキナワ、ヒロシマ、ナガサキ、第二次大戦終結、国連から半世紀を迎える。